

57 楠部彌式《青華甜瓜文菱口花瓶》 一点

昭和八年（一九三三） 陶磁
径二九・〇、高四五・〇

58 楠部彌式《彩埴蟠桃文花瓶》 一点

昭和十三年（一九三八） 陶磁
径三二・三、高四四・九

作品番号57、58ともに京都の陶芸家・楠部彌式（二八九七～一九八四）の作品である。いずれも昭和八年（一九三三）の第十四回帝國美術院展覧会（帝展）、十三年の第二回新文展（文部省美術展覧会）に出品され、宮内省買上となった。《青華甜瓜文菱口花瓶》は楠部の出世作として知られるが、八角に面取りされた金工作品のような重厚な器形に、胴部には陰刻で表した繡文、染付による甜瓜文を交互に配すなど、様々な要素が組み合わされている。

57 《青華甜瓜文菱口花瓶》

楠部自身が本来的に備えていた、色絵の才能と彫塑的な素質が本格的に開花したのが、《彩埴蟠桃文花瓶》に見られる彩埴の技法である。彩埴とは楠部の創始した技法であるが、白色の磁土に顔料絵具を混ぜて、それを薄く溶かしたものを花瓶などの上に堆朱のように厚く塗り重ねることで文様を表す。完成後は陽刻のようにかなり立体感のある文様がそれぞれ異なる色で表されるので、立体版の色絵とも言える技法である。楠部の履歴によれば、この彩埴を初めて作品として発表したのが、この第二回新文展出品作の《彩埴蟠桃文花瓶》であるという。彩埴による限られた色数を効果的に用いて桃の実を表しており、初披露の技法であるとは思われないほど、すでに完成された美しさを湛えている。戦後を通じて、彩埴の技法は楠部の代名詞となっていく。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

1920s-30s モダン・エイジ — 光と影の造型美

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 70

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 宮内庁

平成二十七年九月十二日発行

© 2015, The Museum of the Imperial Collections, Sanmonmaru Shozokan